

#水島朝穂 東京新聞への直言 #高市政権 #戦後80年

戦争原因を論じた「石破所感」に、高市政権への警鐘を見た 各紙は低評価だが 〈水島朝穂 東京新聞への直言〉

2025年10月30日 12時00分

🔒 有料会員限定記事



26年続いた自公政権が終了し、自維政権が始動した。これは単なる連立の組み換えではなく、歴史上の「王政復古」(Restoration)に近い変動が始まったように見える。自民党総裁選で高市早苗氏は「JAPAN is back」と抽象的な表現を使っていたが、就任直後から「どこに戻るのか」が日々明らかになりつつある。19年前に第1次安倍晋三政権が掲げた「戦後レジームからの脱却」が伏線にあることは間違いない。あと2カ月余りで「戦後80年」が終わるが、それを前に、新たな「戦前ゼロ年」が始まったかのようである。

◆東京新聞の社説も石破所感に「否定モード」

今回は10月10日、くしくも公明党の連立離脱当日に出された石破茂内閣総理大臣所感「戦後80年に寄せて」(以下「所感」という)について、[本紙11日付社説](#)を中心に述べよう。

この「所感」について、各紙社説の評価はあまり高くなかった。産経が「平板なリポートのようだ」、読売が「メッセージの発出に見解疑う」と否定的で、朝日も3日後の社説で「言いつ放しで済ますな」と手厳しい。

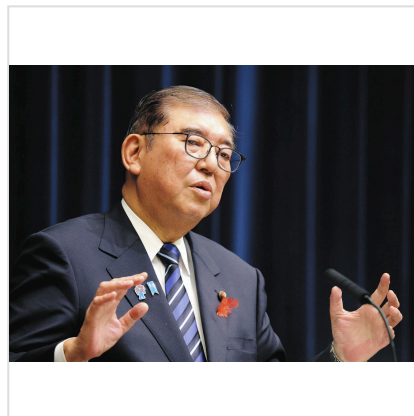
本紙社説は「戦後80年には不十分だ」というタイトルで、「指摘や見解には全面的に同意する」としながらも、8割方、否定モードだった。「迫力不足の最後っ屁」(福島瑞穂社民党党首、[本紙デジタル10日](#))などという評価もあった。

◆「現在も起こりうる」という問題意識

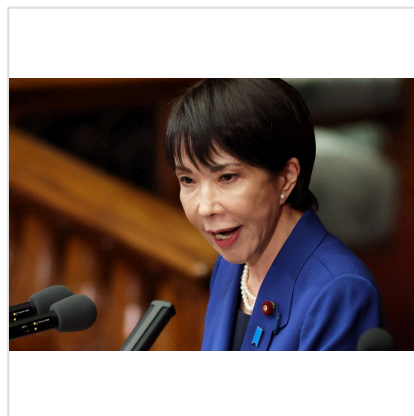
「所感」は確かに「侵略」や「植民地支配」に直接触れてはいない。だが、安倍談話が相対化したこの2点について、むしろ村山談話からの連続性を明確にしようとしたのではないか。その上で、過去の談話が触れなかった「なぜ日本はあの戦争を止めることができなかったのか」という戦争の原因論に徹底してこだわり、憲法、政府、議会、メディア、情報収集・分析という5つのアングルから、事例を挙げながら掘り下げ、「今日への教訓」を引き出している。政府のトップの発信にしては、異例なほど学問的な言及が目立った。「歴史に学ぶ姿勢」の大切さを通奏低音にしつつ、やや冗長に感じられる文章の随所に、高市新政権へのけん制ないし警鐘が見て取れる。

まず、政府や議会の軍に対する統制が失われていく過程を論じているが、これは過去の出来事というよりも、現在も起こりうるという問題意識があるように思う。議会の予算審議が軍に対するチェック機能を果たしていない例として、「臨時軍事費特別会計」の存在に立ち入って言及している点も注目される。戦争中、4年間にわたり軍事費のほぼ全てが特別会計に計上され、予算審議を免れた。

◆この指摘は、既成事実化への危惧がなければ出てこない



記者会見で「戦後80年所感」を発表する石破首相＝10月10日、首相官邸で(佐藤哲紀撮影)



いま、「安保関連3文書」（自維連立政権合意書は「戦略3文書」とこっそり言い換えた）の「前倒し改定」、5年間で防衛費43兆円、「GDP比2%の本年度中達成」など、防衛装備の必要性や中身の審議抜きで既成事実化が進行している現実を、自らがその推進の責任者の立場にいながら、実は危惧していなければこの指摘は出てこない。

反軍演説で除名された斎藤隆夫衆議院議員の議事録が、今もその3分の2が削除されたままとなっていることにも触れる。[8月の本連載](#)でも扱った問題である。石破氏は、10日後に一議員となって、削除部分の復活のため尽力するという決意表明をここでしたのだろうか。

特に私が注目したのは、「所感」の「今日への教訓」の最後の部分である。斎藤議員除名の翌年、衆議院防空法委員会で陸軍省が、空襲の際に市民が避難することは「戦争継続意思の破綻になる」としてこれを否定した事実と言及している。これは記者会見でさらに踏み込んで説明されている。

◆「精神的な結論に導かれて、大勢の人が落命するということがあつてはならない…」

「所感」の記者会見は約90分間にわたり、首相が質問者全員に誠実に答えていたのが印象的だった。そのなかで、名古屋のCBCテレビ記者の質問に対して、岐阜空襲と大垣空襲の死者の違いに触れながら、こう述べた。

「防空法によって、市民は『[逃げるな、火を消せ](#)』』ということであつたと。空襲があればバケツリレーで火を消せということで、岐阜空襲のときにそういうことを徹底するために送られたのは大垣の部隊だった。そこで大勢の人が亡くなるのを見て、[次は大垣だ](#)』と。『逃げるな』なぞと言ったならば、民間人の人が多く犠牲になるということで、大垣の部隊は市民の避難ということをむしろ誘導したのではないかと、いろいろな記録を見る限りそうでございます。結局、いかにして民間人の犠牲を少なくするかということは極めて大事なことであつて、私は、防空法という法律の成立過程も、随分議事録も読みました。焼夷（しょうい）弾は怖くないと、逃げるな、火を消せと…情緒的な、精神的な結論に導かれて、大勢の人が落命するということがあつてはならない…。合理的な判断、そして基本的人権、人命の尊重ということは、国家としてきちんと優先されねばならない」と。

◆戦後80年「所感」の歴史的な意義は

いま、超党派の国会議員連盟が、空襲被害者の救済法案を準備している。毎国会で成立までいかない懸案である。戦後80年のうちに、被害者に一時金が支給できるように、この臨時国会で、石破氏が一議員として努力するという決意表明なのだろうか。

本紙11日付社説は、「石破氏は、戦後80年に閣議決定に基づく首相談話を出せなかった首相として、歴史の中で語り継がれるだろう」と書いた。しかし私は、「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにする」（憲法前文）ための教訓を、「戦後80年」に残した首相として「歴史の中で語り継がれるだろう」と考えているが、うがちすぎだろうか。

水島朝穂（みずしま・あさほ） 1953年、東京都府中市生まれ。早稲田大名誉教授。憲法・法政策論。1997年から2011年までNHKラジオ第1放送「新聞を読んで」のレギュラーを務める。「憲法の動態的探究－『規範』の実証」（日本評論社）など著書多数。1997年からホームページ「平和憲法のメッセージ」（<https://www.asaho.com/jpn/>）を28年間更新中。

衆院本会議での就任後初の所信表明演説で、防衛費増額の前倒しなどを明言した高市首相＝10月24日、国会で（佐藤哲紀撮影）



第2次安倍政権時代に総務相として入閣し、安倍晋三首相（前列中央）とともに記念撮影に臨む高市早苗氏（同右）。2人の政治理念は近いとされる＝2014年9月3日、首相官邸で（平野皓士朗撮影）

【関連記事】[〈全文〉石破茂首相が所感「戦後80年に寄せて」表明](#) [「過去を直視する勇気と誠実さを持ったリベラリズムが大切」](#)

【関連記事】 [〈10月11日社説〉石破氏の所感 戦後80年には不十分だ](#)

【関連記事】 [〈10月10日〉「迫力不足の最後っ屁」 石破首相「戦後80年所感」に社民・福島瑞穂党首が不満 「自民党内への配慮としか…」](#)

【関連記事】 [戦後80年の「8月ジャーナリズム」が伝えたもの 「歴史のif」を問いかける〈水島朝穂 東京新聞への直言〉](#)



なるほど！
0



大切だね
0



もやもや…
0



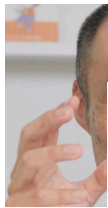
もっと知りたい
0

カテゴリーをフォローする

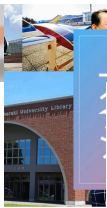
+ 水島朝穂 東京新聞への直言

+ 高市政権

+ 戦後80年



夢はあつ
いい。送



大学、と
びのびと



新しい絆
はここか



豆!豆!
ト